

＜総括＞

試験時間 180分

総解答字数 約91行

〔試験の概観〕

- ・設問1・2の大問構成で、それぞれの「設問」が問1・問2に分かれているという体裁に変化はない。A3用紙に罫線が16.7cm、行幅1.2cmという解答用紙の体裁、総解答字数3,000字前後の論述が要求された点にも変化はない。
- ・昨年同様、25行でまとまった見解を述べさせる問題だけでなく、条件ごとに数行ずつ答えさせる問が設問1で構成された。今年度は、設問1の問1が5行×4・問2が11行×2、設問2の問1が25行、問2は左肩に白地図が示された影響で、約12.5cm×5行+約17cm×20行であった。一般的な文字の大きさと、1行あたり30～40字程度(無理をすれば40字強)は書けるはずだ。
- ・設問1が国内問題、設問2が九州の問題にすぎないと感じた受験生もいたかもしれない。しかし、ローカルに発生する社会問題の背後にグローバルな要素が含まれていたり、グローバルに影響を与えたりするという観点が含まれている。地域性(ローカル)を考慮しながら地球規模(グローバル)の視点で考えるという意味で、例年通りグローバル(グローバルとローカルを合わせた造語)に発生する社会的問題に関する課題の設定と解決を、文系理系にまたがって学際的に追求するという、共創学部らしい出題であった。
- ・求められた思考力も例年と変わらない。設問1では、現状、原因、影響を社会的に考慮しながら問題を発見し解決策を考える力が求められた。設問2では、様々な条件や情報を考慮しながらリスクを推論し、具体的かつ現実的な対策を考案する力が求められた。
- ・多彩な図表、図版の中から、自身の関心に即して必要十分な情報を取捨選択し、現状分析→問題・課題の発見→解決策の提示を行うという、問題発見・問題解決型の出題であるという点も、例年通りである。ただし、設問1は、公立中学校の中学生(問2(1))および12から25歳程度の青少年(問2(2))対象に行うべき宗教教育の範囲を述べる問題、設問2は高レベル放射性廃棄物の地層処分場設置場所の選択について、根拠とともに見解を述べる問題であった。いずれも論点が多岐にわたり難しいテーマであるが、漠然とした抽象論が展開できないように、論点をきわめて具体的に縛った出題であり、具体的な問題設定と解決の力が求められた。
- ・両設問ともに、対象や方法を絞り込む等、条件設定が多いことも例年通りであった。設問条件を読み落とすと、致命傷となる。
- ・大部の図表・図版および文章で資料が構成された点も、昨年通りである。設問用紙5ページ(用語説明を含む)、設問資料13ページであった。資料数、総ページ数、文章の有無は出題テーマにより影響を受けると考えるべきであろう。
- ・新傾向の形式がいくつかあった(〔特筆すべき事項〕参照)。

〔特筆すべき事項〕

- ・例年通り、設問文が長く、理系の背景知識について用語説明が詳しかった。ただし、設問1、設問2ともに、設問文の中でまとまった文章を読ませている点は特筆される。(設問1は、資料に基づいた誤りを含む分析19行の文章、資料2は、用語説明を【補足】という形で、A4用紙2枚にわたる、6つの出典がある文章として設問文に組み込んでいる。)
- ・設問1では、自ら資料をまとめさせるのではなく、資料分析をまとめた誤りを含む文章の中から誤った点を見つけ、説明させる問題が出題された。考察力を公平に審査する見地から、また一般論・抽象論ではなく具体的対象に対する具体的問題設定・解決の力を見る見地からも見解論述をかなり絞り込んだ一方で、資料読解力も審査したいという、この設問固有の事情が反映していると思われる。今後、資料分析が正誤問題に矮小化されると考えるべきではない。
- ・設問2では、白地図に、分析・考察の結果選択した任意の地点をプロットするという新形式の出題があった。
- ・2022年度入試は設問1が理系的、設問2が文系的な出題であったが、2023年度入試は、設問1が文系的、設問2が理系的と、従来の形に戻った。昨年度は理系問題で条件ごとに解答行数を区切った形式の出題であった。2年連続して、条件ごとに解答行数を区切る問題形式をとったものが、設問1に置かれた。

＜課題文の分析＞

大問番号	〔設問 1〕〔設問 2〕
内 容 (主題)	〔設問 1〕 現代の宗教状況に関する統計・資料の分析と、日本の宗教教育のあるべき姿について 〔設問 2〕 原子力発電所のリスクと、高レベル放射性廃棄物の最終処分場立地に関わる科学的データ分析
出 典 (作者) (設問 1)	<p>〔設問 1〕</p> <p>資料 1<文章></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『日本人の考え方、世界の人の考え方Ⅱ：第 7 回世界価値観調査から見えるもの』（電通総研、池田謙一編、勁草書房、2022 年） ・『世界の宗教と人口』（早瀬保子、小島宏編、原書房、2013 年） <p>に基づき作成</p> <p>資料 2<文章></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『宗教年鑑』（令和 3 年版、文化庁） ・「宗教法人法」 <p>に基づき作成</p> <p><図>『宗教年鑑』（令和 3 年版）より引用</p> <p>資料 3<文章・表・グラフ>『宗教年鑑』（令和 3 年版、文化庁）に基づき作成</p> <p>資料 4<文章・表>『在留外国人の宗教事情に関する資料集』（文化庁文化庁宗務課、平成 25 年版、26 年版）に基づき作成</p> <p>(表 1 出典) 法務省「在留外国人統計表」（平成 24 年 12 月 31 日現在）</p> <p>(表 2 出典) United Nations Statistics Divisions, UNSD Demographic Statistics. Population Census Organization "1998 Census" in Pakistan Bureau of Statistics ed., Pakistan Statistical Year Book 2011, 335., National Statistical Office, The Population and Housing Census., Central Bureau of Statistics, National Population and Housing Census 2011.</p> <p>資料 5<文章></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『世界の公教育と宗教』（江原武一編、東信堂、2003 年） ・『ブリタニカ国際大百科事典』（ブリタニカ・ジャパン） ・『世界の教科書で読む「宗教」』（藤原聖子、2011 年） <p>に基づき作成</p> <p>(設問 2 の出典は、次ページ)</p>

<p>出典 (作者) 〔設問2〕</p>	<p>〔設問2〕 <設問内の文章 (〔補足〕)> 補足1 集英社「情報・知識&オピニオン imidas」ホームページ 時事用語辞典「ベースロード電源」 補足2・3 経済産業省・資源エネルギー庁ホームページ「放射性廃棄物について」 補足4 環境省ホームページ「日本の国立公園」(一部抜粋) 補足6 産業技術総合研究所・地震・活断層研究センターの活断層データベースホームページ</p> <p><図> 資料1 環境省ホームページ 資料2 原子力規制委員会・放射線モニタリング情報ホームページ 資料3 政府統計の総合窓口 (e-Stat)「地図で見る統計 (jSTAT MAP)」を用いて作成 資料4 環境省自然環境局生物多様性センターの「自然環境調査 Web-GIS」における国立公園の区域等のページから取得したデータに基づく 資料5 ・産業技術総合研究所・地質調査総合センターのセンターウェブサイト「地質図ナビ」 ・「第四紀火山データベース」「20万分の1日本火山図」 に基づく 資料6 ・産業技術総合研究所・地質調査総合センターのセンターウェブサイト「地質図ナビ」 ・産業技術総合研究所・地震・活断層研究センターの「活断層データベース」 に基づく 資料7 産業技術総合研究所・地質調査調査総合センターの「地殻応力場データベース」 資料8 ・産業技術総合研究所・地質総合センターのセンターウェブサイト「地質図ナビ」 ・国立研究開発法人防災科学技術研究所「地すべり地形分布図データベース」 に基づく</p>
<p>長短・ 難易等 前年比較</p>	<p>長短 (短い・<u>やや短い</u>・変化なし・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・<u>変化なし</u>・やや難化・難化) ※前年と比較してやや短くなったとはいえ、分量が多く、難度が高い試験である。</p>

<大問分析 (設問 1) >

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
設問 1	課題文・図表	学部系統的	現代の日本および世界の宗教状況に関する統計その他の資料 1 から 5 を読み解き、以下の問に答える。 ※解答紙は A3 サイズ、罫線が引かれている。			
			問 1	分析・説明	各 5 行	資料 1 から 4 に基づいた分析を述べた文章中の下線部 (a) から (j) から、明らかな間違いを含む文章を 4 つ選び、具体的にどう間違っているのか、その根拠を資料に基づき説明する。
			問 2	論述	資料 5 を参考に (1)、(2) に解答する。	
			11 行	(1) 日本の義務教育では、独立した科目として宗教を教えることはないが、宗教教団の活動が社会問題化したり、宗教全体への偏見が生じたり、外国ルーツの宗教文化に触れる機会が増えたりしており、宗教についての無知が、社会問題をもたらすことを危惧する声も出ている。公立学校の中学生に対する宗教教育のあるべき姿について、①から④のうち、自分の考えに近いものを一つ選び、その教育を実施すべき理由を、他の選択肢を選ばなかった理由とともに論述する。⑤を選択した場合は、それが宗教の何に関する教育であるのかを明記し、その教育を実施すべき理由および他の選択肢を選ばなかった理由を論述する。 ①宗教教育について一切教えるべきではない。 ②知識教育としてのみ教えるべきである。 ③情操教育としてのみ教えるべきである。 ④知識教育と情操教育を、両方実施すべきである。 ⑤上記 (②から④) とは異なる宗教教育を実施すべきである。		
			11 行	(2) 現在の日本において、青少年 (およそ 12 から 25 歳程度の若者) に対する宗教の知識教育を拡充する場合、優先的に教えた方がいい内容を a から k の中から 3 つ選び、それらを選んだ理由と、それぞれどのように教えるべきかについて具体的に論述する。「k その他」を 1 から 3 回選んでもよいが、その場合は他の選択肢とは明確に異なる具体的な内容を書くこと。 a. 日本のさまざまな宗教教団の歴史と現状、b. 日本の日常生活における宗教的慣習や行事、c. 在留外国人の宗教事情、d. 日本における宗教の社会貢献、e. カルトに関する情報、f. 世界の主要な宗教の歴史、g. 諸外国の宗教事情、h. 政教分離の歴史と理念、i. 無神論・無宗教の思想、j. 宗教的共生や寛容の理念、k. その他		

<大問分析 (設問 2) >

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
設問 2	課題文	学部系統的	<p>原子力発電は重要なベースロード電源の一つと考えられている。また、発電時に二酸化炭素を放出しないことからクリーンなエネルギーと捉えられている。しかしながら、東日本大震災にともなって起きた原子力事故のように、大規模な放射能汚染につながるリスクがある。また原子力発電に使用したウランなどの燃料は、使用後には使用済み核燃料となり、高い放射線量を保っているがほかに使い道のない高レベル放射性廃棄物となる。放射性物質は、人間環境にとって安全な水準になるまでに数万年の時間を要する。その間この高レベル放射性廃棄物を安全に保管する最終処分場を設置しなければならない。最終処分場は今後数万年にわたって安定的に運営できる地点に設置する必要があり、現在様々な国で「地層処分」が検討・実施されている。</p>			
			問 1	論述	25 行	<p>図 1 から 8 に基づき、九州の玄海原子力発電所および川内原子力発電所について、(1) 事故発生時の人間・社会活動に対する影響、(2) 事故発生時の自然環境に対する影響、(3) 自然災害など自然環境からもたらされる事故発生のリスク、の特徴をそれぞれ説明する。</p> <p>解答の分量は指定しないが、(1)、(2)、(3) のどれに対する解答なのかを明記すること。</p>
			問 2	論述	25 行	<p>(1) 今後、九州内に高レベル放射性廃棄物の地層処分場を設置することになったとした場合、図 1 から 8 に基づいたときに低リスクと考える場所を解答紙の白地図に 2 か所示し、その理由を論述する。</p> <p>(2) 2 か所から 1 つに絞るとした時に、追加で必要だと思うデータを示して、その理由を論述する。</p> <p>解答の分量は指定しないが、(1)、(2) のどれに対する解答なのかを明記すること。</p>

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント（設問 1）＞

[答案作成上のポイント]

設問 1

問 1 資料に照らして文章記述の間違いを指摘するデータ・リテラシーの問題である。10 か所の下線部の中から 4 つの間違いを選び、資料 1 から 4 に基づいて、どう間違っているかを説明する。結果としては、4 つの間違いと 4 つの資料がそれぞれ対応している。

いわゆる「正解」のある問題であるから、微妙な言葉遣いにとらわれず、「明らかな間違い」を探す。資料 3 に関する下線部 (e) は一見正しように思えるが、資料 3 の右下の円グラフを見ると、信者の総数が 1.8 億人を超えている。また、神道系と仏教系の信者数を足すと 1.7 億人を超える。日本の総人口が 1.2 億人であることから、神道系と仏教系の両方にまたがる信者が相当数カウントされていることがわかる。『宗教年鑑』は各宗教団体の「申告に基づく信者数を集計」している（資料 1）ことから、こうしたダブルカウントが生じていると推測できるだろう。したがって、日本人の大半が神道か仏教どちらかの信者に二分されているわけではない、ということである。資料 4 では、表 1, 2 を組合せると、在留外国人の宗教人口の概数を算出することが可能である。図表の組合せによって推論を行うことは、データ・リテラシーの重要ポイントである。

それぞれの間違いについて 5 行以内で説明を行う。説明の基本構成は、「下線部は○○と言っている。しかし資料は△△となっている。したがって間違いである。」とすればよい。

問 2 (1) 日本の義務教育における、現行の断片的な宗教知識教育を踏まえ、公立学校の中学生に対する宗教教育のあるべき姿を論じる問題である。選択肢のうち、比較的書きやすいのは②と④であろう。②を選択した場合、知識教育として教える中身（現行の教育への批判を含む）、情操教育を教えるべきではない理由を述べる。情操教育については、その重要性を踏まえながらも、人間の内面操作につながる危険性を指摘することになるだろう。④を選択した場合、単にバランスよく教える、といった形式的な根拠にとどまらず、宗教上の知識教育と情操教育がどのように連関するのかを示す必要がある。いずれにしても、資料 5 は参考にするとしても、その抜き書き程度では評価されない。

③を選んだ場合、(1) では情操教育、(2) では知識教育の拡充を主張するという「ねじれ」が生じる。この点に注意し、(1) では「公立学校」「中学生」にとっての情操教育の意義と、知識教育の不要さを強調する。①を選んだ場合も同様に、公立中学で宗教に関する知識、情操教育の両方ともが不要である理由を説明する。なお、⑤を立論しようとしても、①から④のいずれかに含まれてしまう可能性が高いので、選択すべきではないだろう。

(2) 現在の日本において、青少年に対する宗教の知識教育拡充として、優先すべき内容を論じる問題である。選択肢の中から、c や j を選べば多様な文化との共生を図る趣旨となり、h や i を選べば神の受容を強要しない人権擁護の主張となるだろう。あるいは、e や g から宗教に関する差別への「巻き込み」「巻き込まれ」防止、b や f から歴史的知識を通じた他者理解の必要性といった論旨を構成し得る。3 つの選択肢を関連づける作業はかなり難しいので、まず 2 つを軸にして、もう 1 つの選択肢を無理なく入れることができよう。「k, その他」を選ぶと、a から j とは「明確に異なる具体的な内容」を書くことが難しいから、苦し紛れに k を選択すべきではない。

(2) では、当然、(1) と同じ内容を書くのではない。(1) の「公立」「中学」に対し、(2) では青少年の中でも高校生以上や学校以外の教育の場を意識して、選択肢の具体的な内容と選択理由を説明する。中学までと、高校・大学での宗教教育は、そのあり方に違いが出てよいはずだ。成人年齢が 18 歳になり、とくに高校生からは契約や社会参加に関する責任主体としての自覚が求められる。さらに大学になると、学びの場自体がオープンになるため、それだけ宗教の勧誘も入り込みやすい。このような具体的状況を想定することで、(1) とは異なる視点の論述が可能となる。

また、教育の場は学校に限定されるものではない。家庭内教育に加え、行政やメディアの発信する情報は、教育・啓蒙の機能を持っている。選んだ選択肢に即して、どこで、誰が、どのような宗教の知識教育を行うのかを、できるだけ明確にしよう。

＜答案作成上のポイント（設問 2）＞

[答案作成上のポイント]

設問 2

問 1 九州にある 2 つの原子力発電所について、(1) 人間・社会や (2) 自然環境への事故発生時の影響と、(3) 自然災害からもたらされる事故のリスクを、書き分けて説明する問題である。図から分かることを丁寧に読み取るだけでなく、2 つの原発の地域性の違いをふまえて論じる必要がある。ただし、(1) から (3) それぞれについて説明するため、1 つひとつに多くの文字数を割くことはできない。図の読み取りか、地域性か、どちらか自分の得意な観点に重点を置いて書いてもよいだろう。どちらの要素も満たさず、原発に対する勝手な持論を述べたり、九州とは関係ない議論に終始したりするだけでは、設問の要求に応えられない。特に (1) は、自分の見聞きした知識やイメージだけで書いてしまいがちだが、図 1 から 3 が提示されている意味を考え、図の読み取りを活かす必要がある。その際に図 2 の数値が 1 時間あたりの放射線量であることに注意し、図 1 のデータと食い違いがないようにしたい。

問 2 まず、この問題は、放射性廃棄物の地層処分場の設置の是非を問うているわけではないことに注意したい。九州という限られた土地条件の中からリスクの低い候補地を 2 か所選ぶことは決定事項で、科学的な態度でその作業を行えるかどうかを試されている問題だ。地層処分場の設置に適さない条件はいくつもあるが、自然災害のリスクはまず避けるべきだろう。人口が多い場所や国立公園があることも避けるべきである。そうなると白地図上にプロットできる候補地は限られる。複数のデータを見比べて条件に合う場所を選定するのは大変だが、選定さえできれば、その理由を説明するのは比較的容易である。(2) の文字数が少なくならないよう、配分を考え、バランスよく簡潔に説明しよう。実際の地層処分場の選定では、図で与えられたデータに加え、地下資源を将来掘削する可能性があるかどうかということや、住民の意向、輸送に適しているかどうかという条件が考慮されている。(2) でこれらを「追加で必要だと思うデータ」として挙げることであれば、論述しやすくなるが、これ以外にオリジナルで必要だと思うデータを考えてもよい。ただし、限られた字数の中で、この条件なら 2 つの候補地を絞ることができそうだと考える理由を、説得力をもって論述をする必要があるため、何を挙げるかが、論述の質を決める重要なポイントとなるだろう。

＜学習対策＞

[学習対策]

昨年度までと同様、質・量ともに備わった本格的な小論文問題である。テーマは設問 1、設問 2 ともにきわめて現代的なもので、さらに一見すると日本国内の問題に見えながらグローバルな広がりがある点も共通する。このようなテーマを文理融合の形で出題するのが学部の教育理念に沿った特徴であり、対応するためには十分な準備が必須である。

小論文は一般に、知識・技能に加え思考力・判断力、表現力等も測ろうとするものであるが、九州大学共創学部ではとくに「問題解決のための思考力」が評価される。これまでの出題の多くは、複数の多様な資料が持つ膨大な情報を把握して整理し、何が問題となっているかを明らかにした上で、自分なりに具体的、現実的な解決策を構想することを求めるものであった。そこで、まずは統計等のデータを的確に分析して利用できる能力、また設問文や文章資料を読み解く力、あるいは画像等からある程度直感的にノンバーバルな情報を捉える力などを総合的に向上させていく。さらに解決策の提案には理系的な技術重視の視点、文系的な社会的対応を軸とする視点の双方を持てることが望ましい。そこに到達するには、当然相当の時間と努力を要する。日頃から日本の、また世界の様々な問題に関心を持ち、わからないことは納得いくまで調べることが出発点になる。ただし、時事問題を知識として詰め込むのでは足りない。社会にはどのような問題があり、なぜそれが問題となるかを知ったら、どのような過程で解決していくのか自ら考えていこう。そもそも気候変動のような現代社会の問題の解決に絶対的の正解は存在しないからだ。

さらには、選択される資料の種類や、設問で規定される解答作成上の条件などは毎年工夫して調整されており、解答作成はよくある定型的な「小論文の書き方」でこなせるものでは到底ないことを肝に銘じるべきである。トレーニングの段階では、もう少し易しい小論文問題を実際に解き、指導者による適切な添削指導を受けて繰り返し書き直す。ここで、設問と資料の関連づけなど小論文の基本姿勢を徹底して学ぶ。その上で、過去問を解いて添削を受け、これも書き直しを繰り返すとよい。過去問は学部設置以降 6 年分全てに取り組むことを推奨する。その過程では、インターネット等を利用して情報を収集し、書くネタや問題解決策を提言するコツもつかんでいく。その際には、九州大学共創学部の「エリア」や研究内容を意識しておこう。